

平成 28 年 6 月 12 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370396

研究課題名(和文) 漢魏六朝文学における「異景」描写の展開 辞賦から志怪書へ

研究課題名(英文) On the development of the mysterious scenic description in the Han, Wei and Six Dynasties literature: From cifu(odes of Han period) to zhiguaisu(tales of mystery and supernatural)

研究代表者

大野 圭介 (ONO, KEISUKE)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：30293278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：崑崙山や蒼梧山など中国の周縁の聖山とされる山の描写は、先秦から漢初の詩歌や史書・諸子では、その名を挙げるだけで、その情景の描写はほとんどない。これに対して『山海経のような巫祝の知識がもとになっている文献では、崑崙そのものの情景を装飾豊かな美文で描く。漢代の辞賦作品では崑崙は単に天子の支配の及ぶ最遠の地を示すアイテムと化すが、『海内十洲記』など道教系の文献や、その流れをくむ志怪小説では、依然として崑崙の詳細な風景描写が行われた。以上から、「異景」の描写に熱心だったのは巫術や道教などの宗教知識を伝える文献のみで、正統的な詩賦ではその情景描写に冷淡であったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In the ancient Chinese classics of history, Hundred Schools of thought and poetry during the period from pre-Qin to early Han Dynasty, we see only the names of holy mountains such as Kunlun and Cangwu, and we find almost no description of those landscape. On the other hand, the documents which is based on the knowledge of sorcerers, such as "Shanhaijing", describe Kunlun itself by the ornate style. In the Han period, Kunlun in cifu(odes) works changed into the item which only indicated the most far place where emperor's rule came. But, detailed landscape of Kunlun was still described by the documents of Taoism including the elements of the folk belief and zhiguai(tales of mystery and supernatural) which participates in its genealogy. It follows from what has been said that only the documents to tell religion knowledge such as shamanism and Taoism were eager in description of the mysterious landscape, but the orthodox poetry and ode was indifferent to the scene description.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学 エキゾチシズム 漢魏六朝 志怪小説 辞賦 仙話 風景描写

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国古典における「異景」を描いた作品の研究としては、まず漢魏六朝の地理書について、薄井俊二氏の1998～1999年度科研費(萌芽的研究)「漢代より唐代に至る地方志書の思想史的研究」がある。この成果は同研究の報告書に「漢唐地理書目(稿)その2」としてまとめられ、さらに氏のその後の一連の研究が『天台山志の研究』(中国書店、2011)として結実している。これらは地方志や山岳地誌の思想的背景の解明を目的としたものであり、地方志・山岳地誌諸版本の流伝など書誌学的な考証は極めて有用ではあるが、その文学史上の意義や影響についてはほとんど考慮されていない。

(2) 一方、古典詩賦における「異景」の描写に関しては、古くは小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』(岩波書店、1962)といった大著があり、戸倉英美氏にも辞賦の鋪陳を「言語による世界征服」と規定した論考「漢代の文学における「全体」の精神——漢賦と「史記」を材料としての考察」(『中哲文学会報』10、1985-06、東大中哲文学会)や、同じく漢魏から唐に至るまでの詩賦における時間と空間の描写の展開を、「悲哀」をキーワードに解析した論考「漢魏六朝詩における空間表現の形式とその変化——漢賦から唐詩まで」(『東洋文化研究所紀要』102、1987-02)がある。これらは卓見に富む論考ではあるが、「異景」に対するエキゾチシズムに対してはほとんど言及されていない。「異景」という観点からの漢賦研究は孫久富「漢賦の「都城・宮殿賛美」と長歌の「国見・国褒め」の比較研究」(『相愛大学研究論集』20、2004)が目につく程度で、現状はまことに寥々たるものである。

(3) 日本国外に目を向けても、中国では漢賦研究は日本よりも盛んに行われているが、『楚辞』との関連を論じるものはあっても、詩型や思想内容の観点からの研究が多く、「異景」という観点からの研究は極めて少ない。また山水詩研究の一環として『詩経』『楚辞』から漢賦に至るまでの風景描写に触れた論考は王国瓊『中国山水詩研究』(中華書局、2007)などがあるが、『山海経』を始めとする神話的世界の「異景」との関連についてはほとんど閑却されている。

(4) そもそも中国古代の詩歌には叙景表現が極めて少ないことが夙に指摘されている。もちろん『詩経』にも山川や動植物など自然の景物は少なからず登場するが、それらは人事に絡んだ形でしか描かれず、異景そのものに関心を寄せ、その美をめぐるような表現はまだ出現していない。

一方で、中国古代の叙景表現は神話において顕著である。戦国末には『山海経』のよう

な辺遠の異世界を描く空想的地理書や、宋玉「高唐賦」「神女賦」のように神話的世界への遊行を描く韻文も現れている。当時において描く価値のある景色は現実に存在しないもののみであったといえる。

(5) 本研究代表者の大野は、こうした問題に早くから関心を寄せており、『山海経』に見える描写や表現が先秦兩漢の詩賦に影響した可能性を、論文「『爰に理想郷有り』『山海経』と『穆天子伝』の『爰有』」(『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、2000)や「蒼梧考」(『中国文学報』第68冊、2004)で論じてきた。2009年度から2011年度まで行った科研費・挑戦的萌芽研究「中国古典文学における異文化イメージの形成」は、それらをさらに普遍的なテーマへと発展させたものである。

中国先秦時代において、中原とは異なる独自の文化を持った南方の楚国に開花した『楚辞』文学や、これと類似する形式をもつ「楚歌」は、後世に中国の内なる異景としての南方へのエキゾチシズムをかき立てる詩歌形式となった。そうしたエキゾチシズムが生まれた淵源とその変容の過程を、『楚辞』を始め諸書に残る詩歌や、『山海経』とそれに続く空想的地理書を題材に精査した結果、『楚辞』自体がエキゾチシズムの産物なのではなく、秦漢統一王朝の出現や、漢代における辞賦文学や神仙思想の流行が、『楚辞』文学に内在する「異景」への覚醒を促す要因となったことを、当該研究によって明らかにした。

(6) またこの研究の過程で、『山海経』の時代には巫祝との関連が強うかがえる空想的地理情報が、『海内十洲記』『漢武帝内伝』においては道教とのかかわりをうかがわせるものとなっており、空想的地理情報の担い手が巫祝から道士へと移り変わったことが仙話的長編小説や六朝志怪の成立に大きく関係している可能性に気づくに至った。

このテーマは中国古典文学におけるエキゾチシズムというテーマにおいて大いに考究に値する課題であり、この問題へ歩を進めて、前掲挑戦的萌芽研究での取り組みをさらに深化発展させるために立案したのが本研究である。

2. 研究の目的

(1) 研究目的の概要

本研究は『楚辞』『山海経』など楚国由来の文献との関連が指摘される、漢賦における珍しい景物の描写について、その「南方エキゾチシズム」の特質を解明するとともに、『漢武故事』『神異経』など伝漢代作の仙話的長編小説や、六朝志怪小説など、「異景」の描写に富む作品へどのようにつながっていったのかを解明することを目的とする。異文化イメージの観点からの漢賦や漢魏六朝小説

の研究は、これまで散発的にしか行われておらず、これを総合的な視野から行うことによって、漢魏六朝における南方エキゾチシズムの展開と、その文学作品への影響を解明し、それらを生み出した当時の制作者の心性を明らかにすることをめざす。

(2) 研究期間内に何をどこまで明らかにするか

前節で述べた目的を達成するため、以下の課題を研究期間中の目標とする。

漢賦における「異景」の描写を通して、漢代における「異国」「辺遠」イメージの本質とその展開について解明する。

伝漢代作の仙話的長編小説から六朝志怪小説に至るまでの「異景」描写の変化を通して、漢代における「異国」「辺遠」イメージがその後の文学の「異景」描写にどう影響したかを解明する。

3. 研究の方法

(1) 『全漢賦校注』(費振剛、廣東教育出版社、2005)や「拇指数拠庫」のデータベースシリーズを用いながら、漢賦より「異景」に関する語彙を抽出し、『山海経』『楚辞』『淮南子』等の先行文献の語彙と照合することによって、漢賦における「異景」描写の分析に努める。この作業を通じて、これまで散発的にしか行われていなかった漢代における「異国」「辺遠」のイメージの本質とその展開について、最新の研究成果を広く収集しながら、より明確かつ総体的に理解することを目指す。

(2) 巫祝とのかかわりが指摘される『山海経』以後、漢賦に取り込まれて滅びたかに見えた空想的地理知識が、今度は道士の手によって伝えられるようになったのであり、その間には当然大きな質的变化があったと考えられる。

こうした空想的地理知識の質的变化の過程を解明するため、上記作業に並行して、伝漢代作の仙話的長編小説から六朝志怪小説に至るまでの「異景」描写がいかに展開してきたかを解明する作業を行う。

4. 研究成果

(1) まず予備的研究として、史書や諸子に記録された先秦期の「歌」の分析を行った。その結果、礼教秩序に支配された「士」の世界の周縁にいる「隠者」が歌う「歌」を、「士」が警世として受け取り政治的教訓を引き出そうとしていたことは、『詩経』の詩に民衆の美刺を見出そうとする解釈にも通じる態度であることを明らかにした。『山海経』などに描かれる周縁世界に対する士大夫の意

識を解明する一助となるものである。この成果は口頭発表及び論文に発表した(学会発表、雑誌論文 参照)。

(2) 「異景」に関する語彙を抽出し、『山海経』『楚辞』『淮南子』等の先行文献の語彙と照合する作業の過程において、現存する辞賦作品のうち、漢代初期のものは齊魯の賦家による作品が多く、その形式も『詩経』に倣った四言句が大半を占め、賈誼に代表される『楚辞』の影響が強い諸作品とは別系統のものが中国北方で流行していたことが明らかになった。

(3) 上に関連して、『詩経』大雅や周頌に見える、周の先王をうたった詩における景物描写の変化を分析したところ、純粹に先王を祝頌する詩には見えない風景描写が、開国神話をうたった詩に初めて現れ、古代中国における風景描写が物語に付随する形で始まったことを解明できた。辞賦における「異景」描写の分析の上で参考となる成果である。この成果は口頭発表で発表し(学会発表 参照)、若干の修正を加え論文に発表予定である。

(4) 「異景」描写の分析の結果、以下の事実が明らかになった。

崑崙山や蒼梧山など中国の周縁にあって神々が棲む聖山とされる山の描写は、先秦から漢初の詩歌や史書・諸子においては、その名を挙げるだけで、その情景についての描写はほとんどない。これに対して『山海経』『穆天子伝』のような巫祝の知識がもとになっていると考えられる文献では、崑崙そのものの情景を不死を連想させる風物を中心に装飾豊かな美文で描く。漢初の『楚辞』後期作品でも崑崙への遊行が細やかな描写で描かれるが、司馬相如以後の辞賦では崑崙は単に天子の支配の及ぶ最遠の地を示すアイテムと化す。その一方、『神異経』『海内十洲記』など民間信仰の要素が混じる道教系の文献や、その流れをくむとみられる『拾遺記』『搜神記』等の志怪に、崑崙の詳細な風景描写が見られる。

この変化の鍵として挙げられるのは、漢の武帝が黄河源や旧南越国の地にそれぞれ崑崙・蒼梧の名を当てたことに象徴される、想像上の地名の現実化である。この成果は28年度中に口頭及び論文で発表の予定である。(学会発表 参照)

(5) 本研究の過程において、『詩経』の諸作品のうち川に現れる遊女の姿をうたう「蒹葭」と「漢広」の漢代諸注で、前者は毛伝・三家詩とも求賢の詩と解しているのに対し、後者は三家詩が瀟湘の二女の伝説に結びつけて解釈していることについて、『楚辞』の伝来によって生じた南方エキゾチシズムが影響している可能性に気づくに至り、論文として発表した。(雑誌論文 参照)

なおこのテーマは今後科研費・基盤研究
(C)「先秦兩漢の詩賦とその解釈の再検討
「南方エキゾチシズム」の観点から」(課
題番号 16K02583)にて詳細に解明する予定で
ある。

(6) 当初予定していたものとはいささか異
なる方向になったとはいえ、エキゾチシズム
の端緒としての先秦兩漢文学のさらなる解
明に道筋をつけられたことで、本研究の意義
は達成されたといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

大野圭介、歌う隠士 先秦期における
「歌」の一側面、桃の会論集、査読有、
六集、2013、5-26

大野圭介、「蒹葭」再考 求女と求賢の
アナロジー、詩経研究、査読有、37号、2016、
1-15

〔学会発表〕(計 3 件)

大野圭介、論先秦逸民之詩歌与《漁父》、
2013 年楚辞国際學術研討会暨中国屈原学会
第 15 届年会、2013 年 8 月 17 日、中国河南省
西峡県 鶴河中州国際飯店

大野圭介、試論《詩経》景物描写的演变、
中国詩経学会第 11 届年会暨国際學術研討会、
2014 年 08 月 05 日、中国河北省石家荘市 河
北師範大学

大野圭介、神山の変容 崑崙山の描写を
中心に、第三十一回中国文学会(招待講演)、
2016 年 07 月 23 日(発表予定)、京都市 京
都大学

〔その他〕

ホームページ等：

<http://researchmap.jp/g-daye/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 圭介 (ONO KEISUKE)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：30293278